

児童養護施設で暮らす子どもの“あいまいな対象喪失”とその修復 —学生サークル「こより」の実践活動から—

井上靖子（教授） 田崎大地 天願鈴美（臨床心理学研究室 4 年生）

キーワード：児童養護施設，大学生，あいまいな対象喪失，こころに寄り添うこと

1. 問題と目的

児童養護施設で暮らす子どもらは、親からの不適切な対応によるトラウマ、親からの分離不安、集団生活の緊張感を抱えている。本研究は、学生サークル「こより」の実践活動を通して、大学生らが子どものこころに寄り添う関わりが持つことによるどのような臨床実践的意義があるのか、事例検討をすることを目的としている。

なお、学生サークル「こより」は、本学部の臨床心理学研究室のゼミ生が中心となって、児童養護施設等で暮らす子どもらの遊びや学習を支援する実践活動を行っているサークルのことで、実質的に 2012 年から活動を継続している。

2. 児童養護施設で働く施設職員の現状

児童養護施設とは、児童福祉法第 41 条に定められ、保護者の適切な養育が受けられない子どもを公的責任で社会が保護養育し、養育に困難を抱えている家庭への支援を行う社会的養護の理念に基づく施設である。

社会的養護の対象となる子どもは 4 万 2 千人で、そのうち 601 箇所ある児童養護施設に、2 万 3 千人が在籍している。児童養護施設に依託される子どもの 65.6% は被虐待の経験があり、36.7% に何らかの障害があるという調査結果となっている（こども家庭庁、2023）。

このように施設で暮らす子どもらのこころのケアが急務とされるものの、施設職員数も十分とはいえない。施設職員数であるが、子ども 5 人か 6 人に対して職員が 1 名という配置になっている。

全国児童養護施設連絡協議会（2015）の調査によると、児童養護施設における職員の人材確保や人材育成も課題となっていて、他の職種に比べ、離職率が高く、職員の平均勤続年数が 7.7 年（8 年未満）であり、5 年未満で退職する職員が 54.4% である。厚生労働省（2012）の方針として、児童養護施設等

の小規模化及び家庭的養護推進の方針が示され、子どもの定員 45 人以下、小規模グループケア化等に移行してきているが、一方で、長時間勤務や夜間対応、宿直勤務等などのこれまでの業務上の負担に加え、小規模化に伴って、1 人の職員が担う職務が多様化していること、1 人体制の勤務が増加し、職員 1 人に高い養育能力が求められている等の要因が考えられる。NPO 法人ブリッジフォースマイル（2013）の調査でも子どもの数 40 人以上の施設職員の離職率は 12.9% にとどまるが、40 人未満の施設職員の離職率は 14.7% である。なかでも小規模施設での非常勤職員の離職率 23.4% と小規模施設、非常勤職員の離職率が高率となっている。

以上、児童養護施設での子どもらの暮らしは少人数による家庭的養育を目指されながら、実際、子どもの養育に携わる施設職員の負担が増えている現状が見受けられる。

3. 児童養護施設の子どもの対象喪失とその修復

対象喪失とは、「リビドー（情愛的なエネルギー）を注いだ対象を喪失する経験のこと（Freud, S., 1917）」である。対象には、人、ものやペット、国や故郷、身体器官や機能、理想や生きがいなどがあり、自分の心の外にある外的な人物や環境だけではなく、心にある内的な対象イメージもある。

施設で暮らす子どもは様々な対象喪失を抱えている。第 1 に、一時的でも永続的でも親との離別を経験している。鈴木（1989）は、親を喪失した子どもは、そうではない子どもに比べて、心身の問題が生じやすいことを指摘する。

第 2 に、施設に預けられることで子どもの心内にある良い親イメージの喪失である。特に虐待を受けた子どもの親イメージは、自分を甘やかしてくれる良い対象イメージと厳しく攻撃してくる悪い対象イメージのギャップが大きく、解離しており、部分的な対象関係にとどまっている。良いイメージも悪いイメージも統合された全体的対象関係が形

成されておらず、本来、どんな状況にあっても安心や信頼できる親イメージは喪失している。そのため、過度の攻撃性、貧困な自己像、他者を信頼する能力の欠如、人間関係における逸脱的行動、誰彼となくベタベタと甘える不適切な愛着行動、および、強い愛着をしていた大人を簡単に捨て去ってしまうディタッチメントなどの影響がみられる(西澤, 1994)

こうした外的および内的な対象の喪失の経験に対して、Bowlby, J(1980/1981)は、喪失した経験よりもその経験の後の周囲の人々の関わりが重要であると述べている。施設で暮らす子どもに対して、施設職員だけではなく、大学生などのボランティアが望ましい関わりを持つとき、子どもらは、対象の喪失に対して健全に対処する力を修復していく可能性が生じるのではないかと考えられる。

3. 大学生が子どもらの“ここに寄り添うこと”

大学生が施設で実践活動を行なう場合、業務に追われる職員の負担を少しでも軽減するサポーターとしての役割があるが、大学生が子どもにどのような影響を与え、子どもはどのような経験をしているのか、臨床実践的な意義に焦点を当てた研究は少ない。大学生が施設でボランティアをして得られたことをテーマに作成したレポートについてKJ法による質的分析を行なったところ、次の8点が得られた(井上, 2020)。1, 子どもらの心の傷つきを想像し、子どもに関わることに不安を抱く、2, 子どもは元気で、支え合う優しさがあることに気づいた、3, 子どもから生きていく勇気を得た、4, 子どもの精神発達の未熟さや学力の課題に気づいた、5, 子どもの感情への気づきを助け、双方向のコミュニケーションを取ることの大切さを学んだ、6, スキンシップを求める子ども、嘘や悪さをしてでも関心を向けてほしい子どもの愛着の課題に気づく、7, 子どもとの継続的で個別的な関わりが子どもの未来に良い影響を与える、8, 施設職員が多忙で、疲労がある現状に気づいた、である。これらのうち、特に、5, 6, 7, の学びは、大学生がこころのケアの役割を果たせる可能性があることを示している。

そこで本研究では、まず、児童養護施設で暮らす子どもの対象喪失は、大学生との関わりにおいて、どのような形で表出するのか、その心の状況を明らかにする。そして、2名の大学生の実践活動の事例を通して大学生がこころに寄り添おうとする姿勢をもつことの臨床実践的意義を検討していく。

4. 研究方法

X市内の児童養護施設Xにおいて、2022年11月から2024年2月において、1週間に半日(15時50分~17時30分)、幼児棟や小学生棟にて、2名の大学生(男TA, 女TE, 4年生)が遊びや学習活動に携わり、子どものこころに寄り添う関わりを心がけた。印象深い場面を取りあげ、子どもの対象喪失の影響や大学生の活動の臨床実践的意義を検討した。なお、事例は、2名の学生の卒業研究から引用した。

5. 結果と考察 学生サークル「こより」の実践活動の事例検討

事例1 4歳男児Aと男子大学生TA

【男児Aの臨床像】

小柄な体型だが、元気で活発な性格。

【事例経過】

職員と子どもらが鬼ごっこをしていたところ、男児Aが大学生TAに「お兄ちゃん一緒に逃げよう」と声をかけ、「ここに隠れよう」と言って、大学生TAと一緒に滑り台の陰に隠れた。

その間、皆が鬼ごっこを終えて縄跳びで遊び始めた。大学生TAが男児Aに〈向こう行ってみんなと遊ぶ?〉と声をかけると、男児Aは「行ったらあかん! 鬼に見つかったら殺されるで!」と言い、大学生TAを制止した。A君は戻りたくない様子だったので、そこで2人かくれんぼが始まった。

大学生は10秒数えて〈Aはどこ行った〉と探し、物置の陰に隠れている男児Aを見つけた。A君は楽しそうな表情で「隠れたとこ見とったやろ」と言いながら、「今度はAが数えるからお兄ちゃん隠れて!」と言ったので、大学生TAは別の場所に隠れた。男児Aは指の隙間から大学生TAを覗きながら10秒数えすぐに大学生TAの隠れているところへきて、嬉しそうな顔で「お兄ちゃん見つけた!」と言った。大学生TAが〈もう一回する?〉と声をかけると、男児Aは「ううん、もうせん!」と言い、皆が遊んでいるところへと戻っていった。

【事例検討】

施設で暮らす子どもは、集団での行動が日常である。1対1で向き合ってくれる人がいない。そこで、男児Aは、鬼から逃げることを口実に、2人でいれるチャンスを作ったのであろう。男児Aは「鬼に見つかったら殺されるで!」と言う発言は、迫力があり、大学生TAを引きとめることに成功した。

大学生もその男児Aの2人で隠れたい思いに寄

り添い、2人かくれんぼを始めた。かくれんぼは、目の前の人々から姿を隠して、見つけだしてもらうことに心理的意味がある。ところが、男児 A は、大学生 TA が隠れるところを指の隙間から覗いているなど、隠れるべき他者は、目の前から消え去っていない。男児 A は、職員や子どもらという集団から離れて、そして一時的でも大学生 TA との親密な二者関係を求めた。その二者関係に満足したので、再び、皆のいる集団に戻ることができたのであろう。

事例 2 8歳(小学2年)の女児 I と女子大学生 TE

【女児 I の臨床像】

中肉中背。独占欲が強く、衝動性が強い。ブランやゴムを持ち、他者の髪を触ることを好む。

【事例経過】

1 X年2月28日

女児 I (8歳) は、女児 K (9歳) とルールをめぐる衝突した。職員が女児 I と女児 K を引き離し、別室で女児 K と話を始めると、女児 I は泣き喚いて壁を叩いた。大学生 TE は、1人で座り込む女児 I の元に行き、隣に座った。女児 I に〈どうしたの?〉と聞くと、女児 I は「あいつがうざいのに」と言い、女児 K を睨みつけ、顔を背けた。大学生 TE が隣に座り続けると、女児 I が自ら「I がちゃんと(ルールを)守って正しいことしてるのに、あいつ(K)がだめとか言ってきて、だめじゃないって言ったら蹴ってきた」と怒った口調で喧嘩の状況を話した。大学生 TE が「I ちゃん守ってるのに、だめって言われたら嫌な気持ちになるね」と伝えると、女児 I は何度もうなずき、静かに涙を流した。しばらくすると、女児 I は涙を拭いて大学生 TE を綾取りに誘う。大学生 TE が間違えると、女児 I は笑い、「こうするんやで」と優しく教えた。

【事例検討】

女児 I と女児 K との喧嘩に対して、職員は、距離を置かせ、一方の女児 K だけの話を聴くという対応になり、女児 I は、放置されてしまった。その結果、壁を叩くなどの行動化で訴えた。

そこに大学生 TE が、女児 I の近くに行き、寄り添い続けることで、女児の気持ちに耳を傾けた。それが正しいかどうかは横に置いて、女児 I は、喧嘩に至った状況を語りだし、怒りのため表現できなかった悲しみを味わい、静かに涙を流した。

女児 I の独占欲や衝動性といった問題行動の根底に、大人から注目され、情緒的な関心を持ってほしいという悲しみ、他者の髪を触ることを好むとい

う行動の特徴からも身体接触的な安心を得たいという思いがあったと考えられる。

このように、問題があると認識された子どもは、関心を引き出すために、さらに問題行動を引き起こすことがある。大学生 TE が時間をかけて女児 I に寄り添うことで女児は綾取りをするという双方向の関わりを取り戻した。

6. 考察

6.1. 児童養護施設での子どもの対象喪失の再体験

大学生の実践活動の2場面において、子どもが他児や職員との関わりにおいて、対象喪失を再体験していることが垣間見える。

第1に子どもは、集団生活では、甘え、依存できる特定の愛着対象を見だしにくく、対象との安定した関係の乏しさである。施設においては、学校から帰宅しても、集団生活という緊張が強いられる。事例1の男児 A は、大学生 TA との関係により親密さを深めていくよりも、あっさりと、職員や子どもらがいる場へと戻った点にそうした繋がり刹那さを感じる。だが、男児 A は大学生 TA に対して、一時的にでも親しみのある対象イメージを見て、2人かくれんぼの遊びに誘い込み、愛着対象関係を再現しようとしたことに意味があると考えられる。

第2に、子どもは、実親から引き離されるという喪失体験をどこかに抱えていても、まず、集団生活でトラブルを起こさずに過ごすことが優先されるという点である。そのため、1人1人の気持ちに注目してもらえず、感情をこころで抱え、上手く表現できるためのサポートが得られにくい。事例2の女児 I も、女児 K との喧嘩においても、泣き喚き、壁を叩くという行動による発散が生じた。人との関わりも独占欲の高さ、髪を触るという方法で直接的な接触を求めるなど、8歳という発達年齢よりもより幼児期の自他未分化で双方向性に乏しい対人関係の在り方が見受けられる。だが、大学生 TE の女児 I のこころに寄り添う関わりによって涙を流すという反応の変化へとつながった。女児 I は、トラブルを治める介入でなく、こころに寄り添い、相互交流してくれる対象を求めていたと考えられる。

6.2. 施設の子どもの“あいまいな対象喪失”

大学生 TA と TE の事例場面で見えてくるのは、施設で暮らす子どもの対象喪失の寂しさや悲しさが見過ごされやすいという点である。男児 A と女

児Iの生活史は不明であるが、おそらく実親は存在しながら、施設生活をしていると推測される。このよう対象を失ったと実感できない喪失のことをBoos, P. (1999/2005)が提案した概念で“あいまいな対象喪失”という。こうした“あいまいな喪失”は、本人も周囲の人々も明確な喪失体験と認識されにくい。この概念には2側面がある。1つは、“さよならのない別れ”で、心理的に存在しているが、物理的に喪失している状態のことで、施設等や里親に保護される子どもの実親との別れ、災害や事故による突然死、行方不明者との死別や離別のことである。もう1つの側面は、“別れのないさよなら”で、物理的に存在しているが、対象との生き生きとした関係が喪失している状態のことで、認知症や精神疾患等で意思疎通が困難になった場合が挙げられる。あいまいな対象喪失は、喪の作業(Freud, S., 1917)つまり、喪失した対象との離別に伴う辛い感情を消化し、その経験に適応していく為の心理社会的な対処作業のプロセスがうまく進行しない。複雑で、遷延化された悲しみ(complicated grief)、自分の一部が失われた感覚等が持続すると言われている。対人関係への影響だけではなく、不注意、衝動的な喧嘩、泣く、落ち込む、一人でいたがる、過食や拒食、物事の切り替えが難しい、頭痛や腹痛などの身体症状、指しゃぶり、おねしょ、暗闇を恐れる、年齢不相応な行動を見せる等の心身への影響があるとも指摘されている(原田, 2021)。

6.3. 大学生がところに寄り添うことと“あいまいな対象喪失”の修復

施設で暮らす子どもの“あいまいな対象喪失”は、他児らや職員との日常の対人関係のなかに再現される。学生サークル「こより」の実践活動を振り返ると、大学生は比較的、年齢の近い兄や姉の立場で子ども1人1人に関われる為、日常にある、些細だが、子どもの対象喪失の再体験の場面において、その修復の作業を助けることができる。事例1では、男児Aが一時的にでも、親しみを覚えた大学生TAと二人で過ごせて、安心感を得られたこと、事例2では、女兒Iは、当初は泣き喚き、壁を叩くなどでしか表現できなかった思いを大学生TEが関心を持って受けとめことで、トラブルの根底にあった悲しみを共有してもらえたことに窺える。

施設で暮らす子どもの対象喪失に伴う複雑性の

PTSDに対して、1.安全が確保された、生活リズムが一定の、遊びができる環境、2.子どもの気持ちに共感しつつ、危険な事に限界設定をする、3.過去のトラウマ性出来事について子どもなりの理解を促す、4.自己肯定的認識が持てる支援、5.自己効力感を高め、他者との新しい結びつきを創る(原田, 2021, Herman, J.L., 1992/1995)が挙げられる。

こうした点について専門家でなくても、本事例のように、大学生がところに寄り添うという姿勢を持つことで、子どもの対象喪失の寂しさや悲しみを受けとめる内的な作業を助ける可能性がある。つまり、大学生が子ども個人に関心を持った関わりを提供することが、臨床実践的に、“あいまいな対象喪失”の修復に一定の貢献を果しうると考えられる。

今後、学生サークル「こより」の課題として、大学生が活動で得られた気づきを、施設職員とも話し合い、双方の視点を子どもらへの関わりに生かす機会をつくることや、一般の大学生に、多様な育ちの背景を持つ子どものこころの育ちに大学生の関わりが役立てることを周知するなど、活動の意義を知ってもらう取り組みを展開することが挙げられる。

謝辞:児童養護施設の子ども並びに職員方々に深謝を申し上げる。子どもに真摯に向き合った2名の大学生の真摯な姿勢と努力の蓄積の成果である。

引用文献

- Boos, P. (1999) AMBIGUOUS LOSS.the United of America.the President and Fellows of Harvard College.南山浩二訳(2005):『「さよなら」のない別れ 別れのない「さよなら」』, 学文社
- Bowlby, J.(1980)Attachment and loss Vo.3.Loss, sadness and depression; The Hogarth Press.; 黒田実郎他(1981):『母子関係の理論III』.岩崎学術出版社
- 原田誠一(2021):『複雑性PTSDの臨床』金剛出版
- Herman, J.L. (1992): Trauma and Recovery, Basic Book.
- 中井久夫(1996)『心的外傷と回復』みすず書房
- 井上靖子(2020):2016年~2019年科学研究費補助金報告書
- こども家庭庁(2023):「社会的養育の推進に向けて」
- 厚生労働省(2012):「児童養護施設の小規模化及び家庭的養育の推進のために」
- 西澤哲(1994):『子どもの虐待』, 誠信書房
- NPO法人ブリッジフォースマイル(2013):「全国児童養護施設調査2012 施設運営に関する調査」
- 鈴木乙史(1989):母子家庭の心理学的研究, 母子研究10, 31-40
- 全国児童養護施設協議会(2015):「施設における人材確保等に関する調査報告書」